



Title	日本近現代朝鮮語教育史と相場清
Author(s)	植田, 晃次
Citation	言語文化研究. 2009, 35, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9343">https://doi.org/10.18910/9343</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 日本近現代朝鮮語教育史と相場清

植 田 晃 次

1945 年 이전에도 어느 정도 일본인을 대상으로 한 한국어교육이 이루어졌다는 사실이 학계에서 보고되고 있다. 최근 들어 일본에서 한국어교육이 활성화되면서 일부에서는 제 2 차세계대전 이전과 이후의 한국어교육을 단절된 것으로 간주하는 견해가 있다. 즉 전자는 "지배"와 "억압"을 위한 교육이고, 후자는 "우호", "친선" 또는 "교류", "상호 이해"를 위한 교육이라는 관점에서 보는 것이 그것이다.

본 논문에서는 일본의 근현대 한국어교육사에서 일정한 위치를 차지하면서도 그 성질상 지금까지 별로 주목을 받지 못한 채, 경찰 조직 등 특수한 목적하에서 진행되는 교육을 "공안기관 등에서의 한국어교육"이라고 명명하고, 이 기관에서 한국어 강사로 활동한 아이바 기요시 (相場清) 의 경력을 정리해 보고, 동시에 1945 년을 전후로 한 한국어교육의 연속성에 대해서 고찰하고자 한다.

キーワード：朝鮮語教育史, 相場清, 『韓語講義』

## 1. はじめに

20世紀末から21世紀初にかけて, ソウルオリンピックやいわゆる「韓流」ブームなどを契機に, 日本における朝鮮語教育はその規模が拡大した。高等教育においては, 天理大学・大阪外国語大学・東京外国語大学などの専攻学科をもつ大学の他, 富山大学・県立新潟女子短期大学・熊本学園大学など, 専攻の下に朝鮮関係のコース等を設ける場合がとりわけ1990年代以降増加した。また, 共通教育の外国語科目として朝鮮語が提供されることも増えた。さらに, 中等教育においても朝鮮語を教育の一部に取り入れるケースが増えた。

この他, 「[…]<sup>1)</sup> 防衛庁, 警察学校, 海上保安庁でも韓国語を教えていることが知られている。」(野間・中島 2007: 83) と指摘されているように, これらの公安機関等でも朝鮮語が運用できる人材の養成が行われている。本稿では, 主として中高等教育制度の中で行われるものの他, これらの人材養成のように, 特別な目的の下に行われるものも広義の朝鮮語教育としてここに含める。そして, 前者を「教育制度における朝鮮語教育」, 後者を人材養成を目的とする「公安機関等における朝鮮語教育」と捉え、後者を対象とする。

1) 以下, 「[ ]」内は植田註を表す。「…」は省略の意とする。資料の引用に当たっては, 旧字を新字にした。また, 今日「不適切」とされる語句についてもそのまま引用した。なお, 直接引用部分の「、」は「,」と置き換えずに引用する。

植田他（2007：33-34）では、公刊された資料によりその一部の設置経緯等を簡略に明らかにしたが、노마, 나카지마（2005:210）が「[…] 상세한 실태를 파악할 수는 없었지만[…]」「[詳しい実態を把握できなかったが[…]]」というように、これらの機関での朝鮮語教育の実態については、その性格からつまびらかではない点が多い。

## 2. 本稿の目的・着眼点

第2次世界大戦終戦以前においても、それなりの規模で日本人による朝鮮語教育が行われており、その実態が近年明らかにされてきている。また、第2次世界大戦後の朝鮮語教育史についても、関心が少し持たれもしている（たとえば、梶井1980、梶井1980；1984改訂、山田2004、植田他2006、植田他2007、野間・中島2007）<sup>2)</sup>。

このような中で、朝鮮語教育の量的伸長とあいまって、第2次世界大戦の「戦前」と「戦後」の朝鮮語教育を断絶したものと捉える見方がある<sup>3)</sup>。すなわち、「戦前」は無関心もしくは、梶井（1980：101）が朝鮮語学習の目的について、「[…] 統治政策の徹底、治安維持のための有効な手段が優先している」と見ざるをえない。」と指摘したような支配と抑圧のための朝鮮語教育、「戦後」ことに現在では友好・親善、あるいは交流・相互理解のための朝鮮語教育であるというような捉え方である。

確かに現象を見ればそのような結論を得ることができるかもしれない。しかし、植民地支配の終結によって、いわば「過去の遺産」となった習得された言語が個々人の中から一瞬に消え去るわけではなく、また、新たな状況によって、その「過去の遺産」が社会的・政治的に要求されることもあろう。そんな中で、日本近現代朝鮮語教育史において、一定の位置を占めるものであるにも拘らず、その性質上の制約ともあいまって、「公安機関等における朝鮮語教育」は注目されにくいものとなっている。また、ある種の立場からは断罪の対象として捉えられがちであったこれらの「公安機関等における朝鮮語教育」について、その実態を明らかにすることは、現代日本の朝鮮語教育のありようを考える上でも有益であるだろう。

本稿では、このような観点から、「公安機関等における朝鮮語教育」にあたった人物の

2) とはいえ、2004年から韓国国際交流財団・国際文化フォーラムの主催で、2005年度からは朝鮮語教育研究会がさらに加わり、2007年度からは駐日韓国大使館韓国文化院・韓国国際交流財団・財団法人国際文化フォーラムが主催して行われている、大学等韓国語教師研修会において、2004年度に「朝鮮語教育史」が、2008年度に「韓国語教育史」がそれぞれ1時間開講されたのみであることは、「現場」の「韓国語教師」の中での関心の薄さを反映していると見て差し支えないだろう。

3) 金泰虎（2006：iii）では、（江戸時代の交流に見られるような）「日韓の友好関係は、日本の近代国民国家への転換や成立過程で、意図的に助長された韓国に対する偏見や歪みによって差別意識へと変質した。さらに、日本が西洋に学ぶという西洋重視の姿勢を強めたことから、日本における韓国語学習は西洋の言語と比べて、その活気を失うことになったと考えられる。」とし、近年の「韓国語講座を開設する大学」の漸増、大学での「韓国語講座」の受講者数増加や「韓国語学習の熱気」が社会人にまで及んでいる現象は「[…] 日韓交流の度合いを深め、韓国に対する偏見や歪みが改善される方向へ向かわせている。」と述べている。また、李修京（2005：16）では、第3次朝鮮教育令（1938年）後は天理外国語学校を除き、「[…] 朝鮮語学習は日本人だけでなく朝鮮人児童・生徒・学生からも奪われていった。」とまとめた後、近年、一般社会人への朝鮮語学習の拡大、学校教育への朝鮮語の導入の増加、「韓国文化や韓国語の学習熱」の高まりや交流を巡って、「両国は共に東アジアの屋根の下に生きる隣人として、今後はより一層の交流が深まることであろう。」と結論付けている。

中で、比較的その履歴が明らかな相場清（1886.7.1～1970.9.28）に朝鮮語教育史の観点から注目する。ここでは相場自身による文章や編訳書・教材、関係者の相場に関する言及等を主要な資料とし、日本近現代朝鮮語教育史と相場の関わりを明らかにする。また、そこから、「公安機関等における朝鮮語教育」において、いわば「過去の遺産」が「戦後」へと如何に継承されたかという「戦前」・「戦後」の朝鮮語教育の連続性について考察する。

### 3. 経歴

#### 3.1 「戦前」

相場清を見ると、外務・警察官吏、朝鮮語教師、朝鮮文化研究家などのいくつかの面からとらえることができる。従来はその経歴から、外務・警察官吏として朝鮮近代史において着目されることが多かった（たとえば、宮田監修／田中解説2001：162-163, 233-276や荻野2005：133他）。なお、「相場清年譜」を本稿末に付す。

ここではまず、宮田監修／田中解説（2001：162-163〔執筆は岡本真希子・宮本正明〕）の記述に依拠して「戦前」の経歴を整理し、さらにその他資料により一部補足する。

相場清は1886年7月2日<sup>4)</sup>、熊本県<sup>5)</sup>に生まれ、1903年4月9日<sup>6)</sup>、熊本県派遣留学生<sup>7)</sup>として大韓帝国に渡る。時期は不祥だが韓国語学校（これが何を指すのかは不詳）を卒業する。本人の履歴書では、1905年8月8日に「留学を了る。」とされているという（尙1963：43）<sup>8)</sup>。

職歴について、相場訳・解（1971：訳者略歴）では、1907～1943年について「外務省官吏、翻訳官、通訳官、韓国、満州で諸調査官等歴任。」とされる。具体的には1905年に顧問警察の通訳官として江原道春川に勤務<sup>9)</sup>、内部主事（1908年）、韓国統監府警察官署属（1910年7月1日<sup>10)</sup>）などを歴任する。韓国併合後は、釜山警察署（1913年）、釜山警察署警部（1916年）、警務局（1919年）、朝鮮総督府奉天駐在通訳官（1920）を経て退官した（1921年）。この間、検閲などを担当し、三一独立運動の独立宣言書の起草者を崔南善と特定したとされ、自らも崔南善の子息・崔漢雄に「日本人として […] あなたのお父さんのものを、最も真面目に最もたくさん読んだのは恐らく私が一人じゃなかったか。そこで私はお父さんの筆の癖を存じ上げていた。 […] これ [=独立宣言書] は崔南善が書いたものに間違いないと私は断言した。」（て1965：26-27）と自負とともに語っている。このように、崔南善との交友については相場の文章で度々言及される。

その後、1921年に外務省亜細亜局（事務嘱託）、主として在外朝鮮人民会補助および教育にあたる外務省亜細亜局第二課の翻訳官（1923年12月<sup>11)</sup>）、外務省間島在勤警視（在間

4) 月日は相場清訳・解（1971：訳者略歴）。

5) 崔南善／相場訳（1965：相場清略歴）では熊本市。

6) 月日は相場訳・解（1971：訳者略歴）に、日は尙（1963：43）による。

7) 「派遣」は植田他（2006：4, 2007：29）により補う。

8) 留学期間は2年4カ月ということになるが、中村（1969：14）、植田他（2006：4, 2007：29）では、熊本県派遣留学生の年限（留学期間）は3年間とされる。

9) 荻野（2005：133）では、通訳官補として「六月二十四日付傭聘、春川勤務」とされる。

10) 月日は尙（1963：43）による。なお、ここでは「統監府属に任ぜられ、」とのみある。

11) 月および課名、課の業務内容は尙（1963：43）による。

島総領事館) (1927年), 咸鏡北道警察部高等課警視を兼務 (1928年), 在間島総領事館警察部長 (1927年11月～1929年12月, 1930年5月～1931年6月。1927年11月～1930年2月には在間島総領事館警察署長を兼務) を経た後, 1931年～1938年に外務省亜細亜局 (1934年～東亜局) 第二課理事官として勤める。この間, 1923年には東京・大森で関東大震災に遭遇している (相場1955b: 12)。戦時下 (1937年以降<sup>12)</sup>) には、『外務省警察史』の編纂に関与 (委員・囑託) している。また, 年代は不詳であるが, 「外務省警察官として支那又は満洲国の任地に各赴任せられる」人々を対象に「外務省警察官として予め知つて居て貰ひたい事柄」を「第五回外務省巡査教習科外講話」で述べた記録 (相場述 不詳: 1) である『朝鮮人に就て』からは, 当時の業務の一端がわかる<sup>13)</sup>。

植田他 (2007: 29 [執筆は山田寛人]) が熊本県派遣留学生について, 「修了生は、併合前は韓国政府、併合後は総督府及所属官署の職員になるケースがもっとも多く、そこで通訳として仕事をする者が何人もいた。」というように, あるいは, 「戦前」の公文書にも名前が散見される<sup>14)</sup> ように, 相場は一貫して朝鮮総督府や外務省等の警察・治安維持関係の道を歩んできた人物である。

### 3.2 「戦後」

「戦後」の経歴について, 前出の宮田監修／田中解説 (2001: 163 [執筆は岡本真希子・宮本正明]) では, 「戦後は外務省や東京警察学校で朝鮮語講師。」と簡略に示されているにすぎない。朝鮮語教師としての経歴は5で言及することとし, 以下, 諸資料によりその他の面での経歴を示す。

敗戦直後の経歴は不明だが, 1949年には文部省教科用図書検定調査委員に任ぜられている (相場訳・解1971: 訳者略歴)。「戦前」に朝鮮語を学び、それを用いて実務を行っていた相場が, いつから本格的に朝鮮語を教え始めたのかは明らかではない。また, 5で後述するように, 外務省・警察関係で朝鮮語教師を務める傍ら, 『朝鮮常識問答』や『韓国俚諺集』の翻訳出版を始めとし, 少なからぬ文章を発表し, 朝鮮文化研究家<sup>15)</sup> としても活動していた。学術誌に掲載されたものとしては、『朝鮮学報』所収の相場 (1968) がある程度であるが, 韓国関係の紙誌, なかでも日韓親和会機関誌『親和』誌上に少なからぬ文章を残している。その内容は, 随筆・翻訳・文化紹介・教材・アンケートへの回答・座談会など多岐に渡っている。また, 「漢学者」<sup>16)</sup> とされる側面も持ち, 漢詩が多く残され

12) JACAR (アジア歴史資料センター <http://www.jacar.go.jp/>) Ref.A0603127200, 第1号・昭和十二年四月起・日誌 (国立公文書館) に, 1937年4月19日開催の外務省警察史編纂委員会 (第1回) の出席者として、「相場理事官 (東亜第二課)」と名が挙げられている。(2008年11月8日接続)

13) この他, 手記「朝鮮民族思想に就て」(1942年10月) があるとされるが, 確認できない。ウェブサイト「News and News」(<http://www.newsandnews.com/>) の홍일식 칼럼 「장준하와 최남선」(2004.9.13 17:00付) 参照 (2008年9月30日接続)。

14) 前掲JACARの目録データベース検索による (2008年9月30日接続)。

15) 「ハングル研究家」, 「朝鮮歴史研究家」, 「朝鮮文学研究家」, 「崔南善「朝鮮常識問答」訳者」などの肩書も自称・他称で用いられている (それぞれ, 加藤1962: 35, 相場1965: 6-7, 相場1968: 執筆者紹介, 相場1969: 35) による。

16) 柳根周 (1964: 23) は「有名な漢学者、相場清先生 […]」と述べている。

ている<sup>17)</sup>。晩年は朝鮮人の詩の会にも参加していたという<sup>18)</sup>。また、『親和』誌上の記事<sup>19)</sup>により、1960年代を通して、日韓親和会等の会合にも精力的に参加していたことがわかる。

自他共に言うように、1950年代以降『朝鮮常識問答』の訳業が一因となって眼底出血を患うなど<sup>20)</sup>、健康を害した<sup>21)</sup>。1963年11月3日には韓国文献の多岐にわたる翻訳の功により藍綬褒章を受賞している<sup>22)</sup>。翌1964年5月6日～5月末には藍綬褒章拝受・拝詣を祖先と先輩に報告するため帰郷し、熊本→広島→青島（宮崎県）→博多→大阪→名古屋と友人を歴訪した（相場1964：25）。1965年8月1日には代表作である『朝鮮常識問答－朝鮮文化の研究』を宗高書房から刊行した<sup>23)</sup>。なお、「朝鮮常識問答」は、刊行に先立ち、『亜細亜の叫び』紙（亜細亜同志会、後に亜細亜同友会）や『親和』誌に訳載していた。晩年には「若し体力と事情が許すならば一度原著者崔南善君の墓前に額いて繙訳完了を報告したいと願ひして已まない。」（相場1963：35、崔南善／相場訳1965：339）と崔南善の墓参を切望し<sup>24)</sup>、80歳過ぎには日韓親和会の韓国親善旅行への参加を企図していたが、健康上の理由で叶わないまま1970年9月28日に世田谷の自宅で死去している<sup>25)</sup>。同日、内閣総理大臣から「生前の功により」銀杯を授与された（相場訳・解1971：訳者略歴）。『韓国俚諺集』が刊行されたのは、死後の1971年3月10日である。

## 4. 朝鮮語学習歴

### 4.1 学習過程

ここでは相場の朝鮮語学習について見る。3.1で述べたように、1886年、熊本県で生まれ、1903年、熊本県派遣留学生として大韓帝国に渡り、1905年に留学を了る。

第2期生の中村健太郎（1969：14）によれば、同留学生はソウル日本人居留地の東端に

17) 『親和』19号11頁、27号4-5頁、128号25頁、134号8頁、146号6-7頁、157号3頁、195号31頁、『亜細亜の叫び』38号4面、39号2面、相場訳・解（1971：339）など。

18) 「先生のたのしみは、毎月ひらかれる竹林詩社の会筵である。日本人は先生ひとり、他は韓国人でほとんど漢薬を業とするひとだそう。したがって、詩も会話も朝鮮語である。／「二度ほど優等をとりましたよ」／ちらりと嬉しそうな先生の童顔がのぞく。」（無署名1963：43）

19) 例えば、『親和』92号15頁、101号34-36頁他多数。

20) 出版記念祝賀会席上の答辞で相場自身が「この原書はひどい書物で、[...]」と明かしているように粗悪な体裁であり、同席上で「私の視力も眼底出血で医者にも注意されました [...]」と語っている（て1965：28）。また、尙（1963：42）では、1963年8月9日に行われたインタビューに言及する中で、「先生は「常識問答」抄訳執筆中に、（約十年ほどまえ）視力が弱まり、眼底出血で活字が見えなくなったことがあるとはじめてもらされた。しかし、いまは視力ばかりか体力もしごく健康、[...]」と指摘されている。

21) なかむら（1970：58）は「[...]「韓国の俚諺」がそのご中断されているのは惜しまれるし、訳者の健康も気がかりである。」と述べている。

22) 相場訳・解（1971：訳者略歴）。『官報』（1963年11月5日：11）では「多年韓国語を研究し数多くの韓国文献を翻訳してその文化の理解普及に尽力する等日韓両国民の友好親善に成果を挙げたまことに公衆の利益を興し成績著明であるよつて褒章条例により藍綬褒章を賜わつてその善行を表彰せられた」とされている。

23) 日韓親和会からも同日付で刊行。1986年11月1日には宗高書房から第2刷が刊行。

24) 次のような詩を詠んでいる。「爽氣相交五十年／論文談理漢陽天／桑田半夜滄海／松柏一朝委紫煙／燕去鴻来人事遷／花開葉落世情遷／音容髣髴雲山渺／老骨何時奠墓前」（相場1963：35）。また、尙（1963：42）では、インタビューの「[...]」もし、これから韓国においてになるとしたら、最初にどこを訪ねられますか」という問いに、「それは崔南善君の墓です」と「間髪を入れ」ず返答している。

25) 鈴木一（1971）、「訃報」『親和』202（30頁）、「しんわ・うおるぼ（物故諸氏芳名）」『親和』223（表3）。



あった「楽天窟」で、朝鮮語を主として英・漢・数を学んだという。第1期生（1896年）については柳苾根・李惇雨・李容圭が、第2期生（1899年）については韓章会らが教育にあたったとされるが（植田他2007:29〔執筆は山田寛人〕）、第4期生については不詳である。中村（1969:14-15）は、春秋の朝鮮旅行の際、「習いおぼえた朝鮮語を駆使して、色々と問答するのが次第に面白くなって来」と回想している。さらに、朝鮮語の学習と同時に朝鮮事情の研究も重要な事柄であり、菊地謙譲の『朝鮮半島』（『朝鮮王国』民友社、1896年か）が有用であったとも述べている。ここからは、第4期生の相場も類似した留学生活を送ったのではないかということが推察される。

自身の朝鮮語学習の様子については、相場（1966）で詳細に述べている。それによれば、「先生」は「皆目日本語がわからない」「科举及第の老儒者」で、「専ら漢字の筆談」によってコミュニケーションをとったという。カリキュラムは、ハングルを習った後に「千字文」を学び、半分程度進んだ段階で平行して「通鑑」を習い、次に「簡牘」を習うというものであった。「千字文」の段階では、

私は元来漢文が苦手、というのは少年時代近所の漢文の塾にやらされ、読み違えたら竹刀の割れで頭をコツンと叩かれる。子供心に漢文とは痛いものだと思ひ込んでいたので、ソウルに行って天地玄黄を韓音でたたき込まれたのが、感情的に堪えられない苦痛であった。／勿論日本……熊本……のように竹刀でこそ叩かれなかったが、その代り理論に合わないことを強制された。即ち韓音で「天は低い字だから短か目に発音し、地は高い字だから稍長く……と注ぎ込まれる。元来天が低くて地が高いとは全く無茶な話である。後でこれは漢字の韻から来ていて平字は低く仄字は高いのだという理屈が漢詩の講義を受けたとき始〔マ〕めて呑み込めたけれども、天地玄黄の習い始めにそんな韻音などが解かろう筈がない。

と述べているように、習うより慣れろ式の教育であったことがわかる。

さらに、激音・硬音（濃音）の習得に苦労したことにも触れており、ことに後者については、いささか誇張ではあろうが「日本では想像も付かない奇声、到底真似のできる音ではない」と指摘している。また、「理念上は、純ハングル体の採用が意識されながらも、語尾や助詞以外には、その綴字法が統一されていなかった〔…〕」（植田他2007:96〔執筆は三ツ井崇〕）という時代背景を反映し、綴字法の不統一についても苦労したことが述べられている。「通鑑」については「〔…〕十八史略式の支那歴史であるから興味も湧いた。」というものの、「簡牘」については、「〔…〕漢字の美辞麗句づくめの難文、故事来歴たっぷりな飾り文で、肝腎の手紙の用向はほんのちょっぴり、これには聊か閉口した。」と回想している。

## 4.2 相場清が習得した朝鮮語に対する後年の評価

3.1 で述べたように、熊本県派遣留学生として朝鮮語を学んだ相場清は、その後、外務・警察官吏として朝鮮語を用いて実務を行った。

このようにして習得された相場の朝鮮語について、「朝鮮王朝時代十八才で京城に留学生として渡った相場先生の朝鮮語学は、学問において語学において、ただすぐれた学者で朝鮮語は朝鮮人よりも正確でうまいというほかありません。」という証言がある（金熙明1963：39）。また、「相場先生に逢うと私はいつも昔の祖父のことを思いだします。先生の話される昔風の韓国語と風格に祖父の面影を見出し、なつかしさがこみあげてくるのです。」（金竜煥1963：37）、「三、韓国文の解説、韓国語の会話においてとくに旧韓国時代の宮中および上流階級の日常用語にたいする知識において翁の右に出ずる人なし […]」（趙容万1963：40）というような言及がある。相場の経歴や「宮中」や「上流階級」への接触の可能性から見て、後年のこれらの評価には誇張があると思われるが、「昔風の」朝鮮語で、高い運用能力を持ち、5で後述する相場の『韓語講義 職務篇』に見られるように、ぞんざいな朝鮮語にも当然長けていたと思われる。

## 5. 朝鮮語教師歴

### 5.1 教育の場

相場が「戦前」にも朝鮮語を教えていたのか、また、「戦後」のどの時期から朝鮮語教師として活動し始めたのかはつまびらかではない。

以下、諸資料の記述に拠り、「戦後」の相場の朝鮮語教師としての経歴を整理する。

外務省関係では、1950年10月に、外務省出入国管理庁誕生に際し、同庁長官室（長官は鈴木一、後の日韓親和会会長）で朝鮮語を教えていた（鈴木1971）。また、森田（1963：47）が「今から十三年前のころである。相場清先生が外務省で朝鮮語を教えられていたとき、[…]」と述べていることや、1954～1956年に『親和』誌上に掲載された記事類（相場1954, 1955, 1956）に「外務省朝鮮語講師」という肩書が付されていることから、少なくとも1950年代初頭から中期に、外務省で朝鮮語教師を務めていたことがわかる。

警察関係では、1951年春には、山口廣司国家地方警察本部警備課第三係長（当時）から「ハングル講習講師」を依頼され、橋本[一天]とともに「[…] 老いの情熱を傾け、時に諧謔をまじえながら、[…]」若い警察官にハングルの教え「ていた（山口1971）。さらに、5.2で見る教材、とりわけ職務質問・交通・密航・防犯・経済取締・密造酒・麻薬取締の各章から成る相場・橋本（1952）の存在は、1952年前後に警察関係での朝鮮語教育にも当たっていたこと示している。さらに壺（1963：43）では「現在は東京警察学校朝鮮語講師をされている。」とあり、少なくとも1950年代初・1963年頃にこれらの機関での朝鮮語教師として活動していた。さらに相場訳・解（1971）の「凡例」には、「表紙の写真は、韓国国花、無窮花（むくげ）／この無窮花は、訳者が小平市の校庭に手植えされた紅白の花か



ら……。」との記述があることも、その当時の警察大学校の所在地から見て生前に同校で教鞭をとっていたことを傍証するものである。

また、1963年警察庁訓令第12号「外国語技能検定に関する訓令」<sup>26)</sup>が施行される1964年には、全国警察官外国語技能検定試験<sup>27)</sup>委員を務めている（1月1日施行）（崔南善／相場訳1965：相場清略歴）。この他、1966年7月1日には、「語学教養の功」で警察協力賞を受賞した（相場訳・解1971：訳者略歴）。

さらに、教育機関ではないが「ハングル研究会」などでも朝鮮語・朝鮮文化を教えている。「ハングル研究会」とは、「数年前から相場先生ご指導の下に、故 多久〔安貞〕、小生の両名が世話役となって、ハングル研究会をもち、地味ながらも真しな研究を重ねて今日に及んでいる。」（橋本1971：340）、「〔…〕グループの人々は、ハングルを学び、数年前から月に一度の例会をひらき、文章の構成、俚言、俗語などを、相互研究発表し、日語的ニュアンスにその解答を求めて、たがいに見解の統一を図っている。」（一天生1969：48）というものである。メンバーとしては世話役の橋本〔一天〕・多久〔安貞〕の他、姓のみであるが千、申、喜多、田所、馬場、山田の名が挙げられている（相場訳・解1971：緒言）。

## 5.2 教材

### 5.2.1 概略

「戦後」の朝鮮語教材の公刊は、『英和対照朝鮮語入門』（Lee Eun, Blyth R.H., THE HOKUSEIDO PRESS, 1951〔1950とするものもある〕）に始まったと考えられるが、『朝鮮語入門』（梶井陟，日朝協会，1952）や『新らしい朝鮮語の学習』（宋枝学・梶井陟，学友書房，1954）などの小規模なものを除き、大手出版社からの刊行は『基礎朝鮮語』（宋枝学，大学書林，1957）を待たねばならなかった（植田他2007：84-85）。また、当時の時代的背景から、これらは内容にも制約のあるものであった。このような状況で、相場同様に「戦前」総督府に勤め、「戦後」は警察関係で朝鮮語教育に当たった多久安貞<sup>28)</sup>については、彼の教え子らが、「たいへん熱心なひとで、最初から教えるというとき、教科書がないので、家へお帰りになって、ガリ版をきって、みんなに配布してくれました。」「私もその

26) 警察庁ウェブサイト (<http://www.npa.go.jp/pdc/notification/kokusai/kokuichi/1963kunrei12-kokuichi.pdf> 2008年9月30日接続)。ここでは単に「外国語技能検定」となっている。

27) 「外国語技能検定」は警察庁長官官房長を委員長とし、ロシア語・中国語・韓国語について、警察職員の外国語についての技能を検定し、その技能の向上を図ることを目的とするもので、初級・中級・上級の級位制により第1次・第2次試験が行われる。なお、「韓国語」という部分は、1994年警察庁訓令第15号「外国語技能検定に関する訓令の一部を改正する訓令」によって、「第3条中「および朝鮮語」を「及び韓国語」に、「行なう」を「行う」に改める。」とされていることから、本来「朝鮮語」であったと思われる。（警察庁ウェブサイト<http://www.npa.go.jp/pdc/notification/kokusai/kokuichi/kokuichi19940902.pdf> 2008年9月30日接続）各級の技能検定基準のうち、直接業務に言及した項としては、それぞれ「4 簡単な職務質問、地理教示等を行うことができること。」「4 警察業務において日常必要とされる程度の職務質問、地理教示等を行うことができること。」「4 被疑者の取調べ、供述調書の作成等を行うことができること。」と定められている（註26の訓令第2・3・5・6条）。

28) 1894年生，1914年朝鮮に渡る。京城高等普通学校附設臨時教員養成所卒(1915)、教員・総督府勤務。「戦後」は終戦事務処理本部保護部総務班嘱託，米軍政庁勤務の後、1946年引揚，同和協会・外務省に勤務するとともに、1953年以降、警察庁・警視庁等で朝鮮語教師を務める。1967年死去。（宮田監修・解説(2000: 31〔作成は宮本正明〕），三木1966：19-20，植田他2006：38・149，多久1926；1930再刊：47-48）

教科書を配布してもらいました。そのプリントは、もうこんなになって、本にして持っていますが、文法とか読解とか、今では貴重なものです。」などと語っている（鉄1967：28-29）ように、主に手作りの教材が用いられていたと考えられる。

相場についても、1950年頃の外務省での教育は、「今から十三年前のころである。相場清先生が外務省で朝鮮語を教えられていたとき、崔南善先生の「朝鮮常識問答」を先生が、きれいな字で複写にかかれて私たちのテキストとして使われた。まだ初歩をやっているころの私たちには、崔南善先生の文章は、朝鮮語としては現代調ではないので、むずかしかったが、内容はとても興味あるものであった。」（森田1963：47）というように、手作りの教材を用いて教えていたと見られる。

相場による教材として現在確認できるものは、以下の5冊である。

『韓語講義 第一篇 文法篇』（相場清 述）

『韓語講義 会話篇 下巻』（相場清 述）

『韓語講義 職務篇』（相場清・橋本一天）<sup>29)</sup>

『韓語講義 附録 千字文－韓日音訓併記』<sup>30)</sup>

『朝鮮語 昭和三十一年度語学研修教材』管理部人事課（相場清 述）

『韓語講義』と題された4冊は一連の教材であると見られ、「職務篇」にある以下の記述から、相場が編纂に関っていたことが明らかである。1952年3月中浣付で「講師 相場清 識す」とした「附記」には以下のようにいう。

この職務篇は昭和二十七年一月より四月まで再講習を受けた四十名の若い人々が、その職務上の体験に基づいて各部門を分担し、擬問擬答の形体に編み出したものを、同僚の橋本一天先生と共決して、韓語と和語を対照併記したものである。

内容を併せて考えるに、これらは1952年頃に警察での朝鮮語教育に用いられたものと推測される。また、副題から推しはかるに、このほか少なくとも「会話篇 上巻」が存在すると考えられる。

また、『朝鮮語 昭和三十一年度語学研修教材』には表紙に相場の名が、冒頭（1頁）に「相場清 述」とある他、巻末（63頁）には「昭和三十一年十一月二十四日筆了／相場生」との記述がある。表紙に「管理部人事課」とあるが、如何なる機関によるものかは明らかで

29) 『韓語講義 職務篇』は、直接「相場清述」等の記載がなく、厳密な意味では著書とはいえないが、「附言」に相場の名があることなどからここで取り上げる。なお、東京大学附属図書館OPAC蔵書目録データベースでは、共著者の著者標目が「橋本、一夫<ハシモト、カズオ>と誤って登録されている（2008年9月30日現在）。

30) 『韓語講義 附録』もまた、直接「相場清述」等の記載がなく、厳密な意味では著書とはいえないが、他の教材と一連のものであること、本稿の筆者が閲覧したものが、後述のように、相場清から末松保和に贈られたものと見えることからここで取り上げる。

はない。1956年に外務省もしくは警察関係機関での朝鮮語教育に用いられたものと推定される。

このほか、直接相場の名は示されていないが、構成や様式、書名等から見て、相場が関った可能性があるものとして、以下のものが存在する。

『朝鮮語講義 第一巻』<sup>31)</sup>

いずれも分ち書きの不正確さ・不統一などが見られる。また、『韓語講義』では、朝鮮語の呼称に韓語を用いている。

これらは講習用教材の類と見られ、その性質上ほとんど現物が見られない。そのため本稿では基礎データとして、まずそれぞれについて、その書誌を以下に示す。内容の詳細についての検討は稿を改めて行いたい<sup>32)</sup>。

### 5.2.2 『韓語講義 第一篇 文法篇』(相場清 述)

謄写版。144頁。縦書。25 c m (B 5 版)。奥付などはなく、刊年・刊行者は未詳であるが、『韓語講義 職務篇』等と一連の教材であり、ともに1950年代初に警察関係機関で教科書として用いられていたものと見られる。梶井(1980:200)では、「一九五〇年代前半期のものと推測されるが発行年月不詳。」としている。

富山大学附属図書館中央図書館梶井文庫蔵(図書 I D : 11901612821)

以下のような構成である。

第一篇 韓語文法(第一章 韓字、第二章 名詞、第三章 代名詞、第四章 天爾乎波、第五章 動詞及び形容詞、第六章 接統詞、第七章 副詞、感動詞、第八章 助辞、第九章 数詞、第十章 接頭語と接尾語)

第一章第三節は「韓字の構成、発音、綴字に関する天理大学齊藤[マ]教授の解説概要」と題し、横書で齋藤辰雄(1950:134-148)がほぼそのまま引き写す形で「抄書」されている。また、「抄書」末に、「齊藤[マ]先生の解説は尚お[マ]この後に音便関係など詳細を極めて居るが、是等は本講義のこの後の説明に順次随所に折込むこととする。」との註記がある。

本書は一連の教材のなかで最も大部なものではあるが、上記「抄書」のほか、第二章以降の内容は奥山仙三『語法会話朝鮮語大成』<sup>33)</sup>の第一編(語法)の第二章(名詞)～第十章(接

31) 本文冒頭にはこのようにあるが、表紙には『朝鮮語基礎会話篇(一)』と書かれている。

32) これらの教材は東洋史学者・末松保和と朝鮮文学者・梶井陟の蔵書となったものである。相場の教材がこの2人の蔵書となったことの意味も考察対象となるかもしれない。

33) 1928年4月の朝鮮教育会発行初版、同再版、1929年6月10日の日韓書房発行初版などがあるが、ここでは日韓書房版初版を用いた。

頭語と接尾語)を踏襲したものであり、6.2で後述するように完全にオリジナルなものとはいえない。なお、巻末には、「[...]」この篇の講義を終るに当り、奥山仙三先生の名著「朝鮮語大成」に負う所極めて大なるものあり。[...]」(143-144頁)と付言されている。

### 5.2.3 『韓語講義 会話篇 下巻』(相場清 述)

謄写版。71頁。縦書。25cm(B5版)。奥付などはなく刊年・刊行者は未詳であるが、『韓語講義 職務篇』等と一連の教材であり、ともに1950年代初に警察関係機関で教科書として用いられていたものと見られる。上巻が存在すると思われるが、存在の確認に至っていない。

富山大学附属図書館中央図書館梶井文庫蔵(図書ID:11901612813)

第六章から始まり、以下のような構成である。

第六章 言語及心情、第七章 動作及作事、第八章 性行及事態、第九章 疊辞、第十章 俚諺、第十一章 講演

註が若干付されているものの、第十一章を除き、各章は上半分に朝鮮語、下半分にそれに対応する日本語が示され、漢字語については朝鮮文字に傍線が付された上で、上部・朝鮮語の上にその漢字が示されている<sup>34)</sup>。基本的には以下のように各章のテーマに関する短文とその日本語訳の羅列から成り、問答形式にはなっていない。

#### 第六章 言語及心情 (언어및심정)

妄発	1 말을, 함부로 하면, 망발되기 가, 쉽습니다.	言を無暗に喋ると失言することが間々 あります。
或	2 말을, 잘하면, 못될일도, 혹, 되는수가있습니다.	うまく話をするとう出来ない事でも、 どうかすると出来ることが有るものです。
	3 이르기를, 잘못한탓이니, 다시, 일러 보시요.	云い方が拙づかつたからだから。云い直 して御覧なさい。
恭遜(恭順)	4 공순(公順)히, 말하고, 정답게, 수작하시요	丁寧(丁寧)に話をして愛想よく応対なさいませ。

このような対訳形式は、警察関係のもの(丁奎鳳1917:1921<sup>5</sup>, 李完応・伊藤1928:1942<sup>16a</sup>, 同1928:1942<sup>16b</sup>, 1928:1942<sup>11</sup>, 朝鮮総督府警察官講習所1941)を含め、「戦前」の朝鮮語教科書類等にしばしば見られるものである。ただし、丁奎鳳(1917:1921<sup>5</sup>)などと異なり、朝鮮語部分に振り仮名が付されていないことから、一定の朝鮮語能力を有する者を対象にした教育に用いられていたものと推測される。

34) 漢字語の漢字と例文番号の間、朝鮮語と日本語の間はそれぞれ線で仕切られている。

第十一章は崔南善『朝鮮常識問答』からの「抄写」であり、「나라 이름」・「大韓」의 由来・「코리아」의 由来・「靑丘」의 由来」を取り上げている。

#### 5.2.4 『韓語講義 職務篇』（相場清・橋本一天）

謄写版。75頁。縦書。25 c m（B 5 版）。附記頁に「部外秘」との押印がある。奥付などではなく刊年・刊行者は未詳であるが、5.2.1 で見たように「附記」からも、以下のような内容からも1952年頃に警察関係で教科書として用いられていたものと見られる。

東京大学韓国朝鮮文化研究室蔵（登録番号：4817322763）

裏表紙には花押とともに、末松保和の蔵書印がある後出の『韓語講義 附録 千字文－韓日音訓併記』と同一と見られる筆跡で「昭和廿七年六月十八日」と書き込みがあり、末松旧蔵書と見て差し支えない。

以下のような構成である。

第一章 職務質問，第二章 交通・・・自動車、自転車、歩行者、その他，第三章 密航，第四章 防犯・・・少年補導，第五章 経済取締・・・米穀、古物，第六章 密造酒・・・摘発 取調，第七章 麻薬取締・・・捜査 取調

体裁は『韓語講義 会話篇 下巻』と同様に、「戦前」の朝鮮語教科書類等にしばしば見られるものである。ただし、『韓語講義 会話篇 下巻』とは異なり、各短文は単なる羅列ではなく、基本的に問答の形式を採っている。内容は上記章立てからも明らかなように、以下のような<sup>35)</sup> 警察官に必要とされる極めて実務的な問答である。

#### 第一章 職務質問（직무질문）

（午前三時半頃）（오전세시반쯤）

暫間 警察官	1 여보시오 <u>잠간</u> 봅시다 나는 <u>경찰관</u> 이요。	もし、一寸御待ち下さい。警察の者ですがねー。
	2 이렇게 일찍히 여기로 가오	こんなに早く何処へ往くんですか。
蔬菜	3 세밀이니깐 <u>채소</u> 사로 <sup>[77]</sup> 「미하라」까지 갑니다	年末で野菜物を仕入れに三原まで行きます。
	4 그렇겠오, 헌데, 어디서, 왔오。	そうですか。何処から来たのですか。
	5 「다카오 무라」에서 왔읍니다。	高尾村から来ました。

上記の文の「사로」（「사러」が正）のような書き誤りや、分かち書きの不統一など表記法の問題も散見されるものの、後年行われる 5.1 で既述の全国警察官外国語技能検定試験の基準に当てはめれば、初級（「4 簡単な職務質問、地理教示等を行うことができるこ  
35) 例文番号の間，朝鮮語と日本語の間はそれぞれ線で仕切られている。

と。)」から中級（「4 警察業務において日常必要とされる程度の職務質問、地理教示等を行うことができること。」）程度にあたるものと見られる。

### 5.2.5 『韓語講義 附録 千字文一韓日音訓併記』

謄写版。84頁。縦書。25cm(B5版)。奥付などではなく刊年・刊行者は未詳であるが、『韓語講義 職務篇』等と一連の教材であり、ともに1950年代初に警察関係機関で用いられていたものと見られる。本文冒頭には、「韓語講義 附録其一」とあり、「其二」以降の存在を示唆しているが、その存在はいまのところ確認できない。

東京大学韓国朝鮮文化研究室蔵（登録番号：4817139597）

84頁には花押とともに「昭和廿七年九月相場氏所贈」と『韓語講義 職務篇』と同一と見られる筆跡で書き込みがあり、編者は相場であると考えられる。また、「はしがきと凡例」に末松保和の蔵書印がある。

以下のような構成である。

「はしがきと凡例」・「千字文索引」に続き、本文となる。本文は「正字」・「韓訓」・「韓音（ ）内は正音」・「和音」・「和訓」・「註解」から成り、千字文が以下のような表となっている。

1	天	하늘	천(런 [マ] <sup>36)</sup> )	テン	あめ、そら	天地は玄黄にして
2	地	따	지(디)	チ	つち、とち	
3	玄	검을	현	ゲン	くろし	
4	黄	누루 [マ]	황	クワウ	きなし	

「はしがきと凡例」では、朝鮮語には日本語同様に「夥しい漢字語音が混入している」こと、「朝鮮では漢字音修得の為に、古くから千字文の素読を子供の時にやらせていた」ことなどに触れ、「韓語修得の一助としてもこの千字文は極めて有効である」と述べている。4.1で見た相場の朝鮮語学習初期にも千字文が用いられたこと、奥山仙三『語法会話朝鮮語大成』などでも附録に千字文が収められていることを想起すれば、当時の教授法の一端を伝えている。

本書で特徴的な点は、誤字・脱字が極めて夥しいことである。付された「千字文正誤表」には131箇所が挙げられている。単純な誤りの他、以下のような誤字等が散見される。

天：턴을런（1頁），萬：만の口をコ（13頁），尊：높을エの下にㅅ（28頁），顛：기우러질을기우러 [マ]（33頁），轂：곡을ㅅの下にㅈ（44頁），密：뽕을ㅅの下にㅈを書き、その右にㅈ（48頁），修：뒹의ㅈを刀（81頁）

これらは、朝鮮文字についての知識は若干程度持つものの、朝鮮語自体に対する知識は低い者による誤りと推測される。従って、謄写版原稿の筆記生は相場自身ではないと思われ  
36) 付された「千字文正誤表」では「턴」と正されている。



れる。前述のように、『韓語講義 職務篇』にも사리를사로と書き誤ったものがあり、謄写版原稿の（一部の？）筆記生が相場自身ではない蓋然性を示している。

#### 5.2.6 『朝鮮語 昭和三十一年度語学研修教材』管理部人事課（相場清 述）

謄写版。63頁<sup>37)</sup>。縦書。26cm（B5版）。奥付などはなく刊年・刊行者は未詳であるが、本文冒頭に「相場清述」とあるほか、既述のように巻末に「昭和三十一年十一月二十四日筆了／相場生」との記述がある。表紙には相場の名とともに「管理部人事課」とあるものの、5.2.1で述べたようにその詳細は明らかではないが、1956年に外務省もしくは警察関係機関での朝鮮語教育に用いられたものと推定される。書名では朝鮮語とあるが、本文では朝鮮語を基本的には韓語と呼んでいる。44～45頁が重複しているが、45頁の内容が異なっており、後の45頁は前の45頁を補足・修正したものである。

富山大学附属図書館中央図書館梶井文庫蔵（図書ID：1190178245X）

以下のような構成である。

第一章<sup>38)</sup> 韓字（第一節 韓字の発生、第二節 韓字の構成、第三節 韓字の反切、第四節 重母音、第五節 重子音、第六節 終声(原語받침)、第七節 終声の種類)、第二課 韓字の書き方、第三課 韓字の読み方、第四課 漢字音、第五課 韓字母のローマ字表現、第六課 主なる助辞 其の一、第七課 数詞、第八課 動詞（第一節 動詞の分類、第二節 活用字、第三節 動詞の活用通則、第四節 動詞の活用態、第五節 変格動詞、第六課 [마] 動詞の派生語）

朝鮮文字の説明から始め、「助辞」（-는/은, -가/이, -를/을, -로/으로, -에, -에게, -한테, -더러）、数詞および動詞とその「活用」を説明している。

#### 5.2.7 『朝鮮語講義 第一巻』（『朝鮮語 基礎会話篇（一）』<sup>39)</sup>）

既述のように、直接相場の名は示されていないが、構成や様式、書名等から見て、相場が関った可能性があるので参考に示す。

謄写版。56頁。縦書。25cm（B5版）。奥付などはなく刊年・刊行者は未詳であるが、本文末に「昭和二十九年六月写」との記述がある。

富山大学附属図書館中央図書館梶井文庫蔵（図書ID：11901782441）

全50課から成り、第五十課に「(俚諺)」とある他は各課に表題はない。課末に些少の註を付した課もあるが、各課は朝鮮語の短文から成り（数詞等を扱い短文のない課を除く）、日本語訳は付されていない。各課の短文は問答形式になっている場合と、短文の羅列の場合がある。漢字語については朝鮮文字に傍線が付されず、上部・朝鮮語の上にその漢字が

37) 富山大学附属図書館総合目録データベースWWW検索サービスでは、62頁と登録されているが（2008年9月30日現在）、現物は63頁までである。

38) 2以降は「課」。

39) 書名については、5.2.1 参照。

示されている。第一課は動詞가다・오다・사다・팔다を例に「基本」(가・오・사・팔)と하오体で「説明」・「要請」・「疑問」・「敬語」とパラダイムを示している。

## 6. 相場清を通じた「戦前」・「戦後」の朝鮮語教育の連続性

### 6.1 教材の形式

5で見たように、これらの教材は形式の面で「戦前」の教材類にしばしば見られる形式を踏襲している。すなわち、基本的には問答形式であれ羅列であれ、テーマに関する短文の集合から成り、多くの場合、日本語訳が併記されており、それを記憶することが求められるというものである。また、漢字語の漢字表記、日本語との千字文の重視といった共通点も見られる。これらは『交隣須知』等の近代の教材にも遡れる点が少ないと思われる。

### 6.2 教材の記述の踏襲

5.2.2で『韓語講義 第一篇 文法篇』が『語法会話朝鮮語大成』を踏襲していることを述べた。ここで具体的に見てみる。

たとえば、第二章「名詞」第一節「本来の名詞」の冒頭を比べると、表1の通りである。

表1 『語法会話朝鮮語大成』と『韓語講義 第一篇 文法篇』の本文の対比

『語法会話朝鮮語大成』(15～16頁)	『韓語講義 第一篇 文法篇』(31頁)
<p>此处で本来の名詞と謂ふのは、以下第二節及び第三節に謂ふ所の、用言即ち動詞・形容詞等から出た名詞、及び外来の名詞に対して謂つたので、換言せば、朝鮮語に於ける純粹の名詞といふ意味である。</p> <p>: 개 犬 말 馬 소 牛 집 家 머리 頭 팔 腕 개구리 蛙 : 사람 人 까치<sup>40)</sup> 까사 ㄴ ぎ 쌀 米</p>	<p>名詞の中には本来の名詞と、用言即ち動詞や形容詞から来たもの、それに外国語や漢字の熟語から来ているものなどがあることは和韓両語に共通する所である。本節では先づ韓国本来の名詞に付て述べる。</p> <p>: 개 犬 말 馬 소 牛 집 家 팔 腕 다리 足 머리 頭 사람 人 까치 鵲 (鳥の名) 나무 木</p>

もちろん文言の加減等はあるが、基本的に『語法会話朝鮮語大成』を下敷きにして、『韓語講義 第一篇 文法篇』の多くの部分は執筆されている。説明・例文などがそのまま引き写されている部分が多い。

また、『韓語講義 附録 千字文』についても、同様のことが言える(例えば、「はしがきと凡例」の一～三は『語法会話朝鮮語大成』(日韓書房版)15頁の記述と類似している。)

### 6.3 朝鮮語教育の継承

6.2で見たように、たとえば、奥山仙三『語法会話朝鮮語大成』の形式・内容は相場清『韓語講義 第一篇 文法篇』に引き継がれている。後者によって朝鮮語を学習した人々は奥<sup>40)</sup> ㅍはㅍで表記されているが、ここでは印刷の都合上、やむを得ずㅍで表記した。

山仙三の朝鮮語を、相場清の朝鮮語を通して学んだことになる。これを見ると、相場清を介して、「戦前」の朝鮮語教育が「戦後」の朝鮮語教育にもある意味で継承されたといえよう。さらに、梶井陟（1952：3）が執筆時に特に参考としたものとして同書を挙げ、読者にも勧めているように、当時としては詳細かつしっかり記述された『語法会話朝鮮語大成』の影響は「戦後」の朝鮮語に少なからず及んでいる<sup>41)</sup>。

さらには、奥山仙三（1929：内表紙裏）には、「このさゝやかなる努力のあとを恩師金澤庄三郎博士の座右に捧ぐ一仙三一」という献辞が見られるように、奥山は金澤庄三郎の教え子である。無論、師弟関係が教育の継承と必ずしもつながるというわけではないが、連続性の源をさらに遡ってみることもできよう。

このような意味で、「戦前」の朝鮮語教育は「戦後」の朝鮮語教育と連続性を持ち、「戦前」・「戦後」を生きた相場清は両者の朝鮮語教育を仲介する役割を果たした人物とも看做すことができる。

## 7. おわりに

相場清は外務・警察官吏、朝鮮語教師、朝鮮文化研究家など様々な側面を持つ人物である。本稿では、相場自身の文章や教材、関係者の相場に関する言及等を主要な資料として、朝鮮語教師としての相場に注目した。

まず、相場の経歴を整理し、日本近現代朝鮮語教育史と相場の関わりを明らかにすることを試みた。熊本に生まれ、西南戦争後、朝鮮語に活路を求めて、日本による朝鮮の植民地支配という背景の中で、朝鮮語を生業とする外務・警察官吏として活動した相場は、「戦後」、朝鮮戦争開戦の頃から公安機関等で人材養成のために朝鮮語を教えた。

また、「戦後」の朝鮮語教師としての活動は、「戦前」・「戦後」の朝鮮語教育を仲介するという側面を持つことになった。

このように、いふなれば、広義の朝鮮語教育の「舞台裏」で生涯を送った人物であるといえよう。

今後の課題として、未発見の資料、とりわけ存在したと推定される『韓語講義 会話篇上巻』などの教材の発掘と、相場による教材の詳細な分析が必要である。また、相場に教育を受けた世代からの聞き取りも課題のひとつである。

41) 同書は「[...] 朝鮮総督府編纂の名義で最も広く行はれた『朝鮮語法及会話書』をもとに「作り替へ」たものである（奥山1929：上梓に当つて 2）。また、梶井（1952）にも、奥山（1929）から引き写した、もしくは参考として改作したと思しき例文等が散見される。例えば、奥山（1929）と梶井（1952）のそれぞれ17頁と32-33頁、34頁と37頁、39頁と41頁、90頁と79頁などである。

## 引用文献一覧

- 相場清 述（不詳）『朝鮮人に就て（第五回外務省巡査教習科外講話）』
- 相場清（1954）「善意をくむ」（アンケート「日韓関係に思う」）『親和』4
- 相場清（1955a）「朝鮮の「一家」の思い出話」『親和』17
- 相場清（1955b）「朝鮮に由縁深い重光さんの面影」『親和』19
- 相場清（1956）「早春」『親和』27
- 相場清（1963）「訳語余喘」『親和』117
- 相場清（1964）「西下謾筆」『親和』128
- 相場清（1965）（アンケート回答）『親和』142
- 相場清（1966）「語学の難かしさ」『親和』146
- 相場清（1968）「金笠の詩風」『朝鮮学報』48
- 相場清（1969）（アンケート回答）『親和』192
- 相場清訳・解（1971）『韓国俚諺集』日韓親和会（ハングル研究会責任編集）
- 相場清・橋本一天（1952）『韓語講義 職務篇』（部外秘）
- 李修京（2005）『この一冊でわかる韓国語と韓国文化－総合韓国文化－』明石書店
- 宍（1963）「夏の松原町－相場先生訪問記－」『親和』117
- 一天生（1969）「読者短信」『親和』184
- 李完応・伊藤韓堂（1928：1942<sup>16a</sup>）『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇』朝鮮語研究会
- 李完応・伊藤韓堂（1928：1942<sup>16b</sup>）『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇』朝鮮語研究会
- 李完応・伊藤韓堂（1928：1942<sup>11</sup>）『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇』朝鮮語研究会
- 植田晃次他（2006）『朝鮮語教育史人物情報資料集（2005～2006年度科学研究費補助金基盤研究（B）「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」報告書（1））』
- 植田晃次他（2007）『日本近現代朝鮮語教育史（2005～2006年度科学研究費補助金基盤研究（B）「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」研究成果報告書）』
- 荻野富士夫（2005）『外務省警察史－在留民保護取締と特高警察機能－』校倉書房
- 奥山仙三（1929）『語法会話朝鮮語大成』日韓書房
- 梶井陟（1952）『朝鮮語入門』日朝協会
- 梶井陟（1980）『朝鮮語を考える』龍溪書舎
- 梶井陟（1980；1984改訂）『朝鮮語を考える』龍溪書舎
- 加藤松林人（1962）「日韓親和会記念パーティー☆創立十周年と「親和」百号発刊を祝って」『親和』101
- 金泰虎（2006）『韓国語教育の理論と実際』白帝社

- 金熙明（1963）「崔南善著「朝鮮常識問答」訳載完結を迎えて」『親和』117
- 金竜煥（1963）「崔南善著「朝鮮常識問答」訳載完結を迎えて」『親和』117
- 齋藤辰雄（1950）「朝鮮語文法（一）音韻篇－朝鮮文字の構成と発音－」『日本文化』28、  
天理大学宗教文化研究所
- 鈴木一（1971）「序」相場清訳・解（1971）所収
- 多久安貞（1926；1930再刊）「私の生活は漸く朝鮮語化時代に入った」『월간잡지朝鮮語』  
2（2）（通巻5号）（『월간잡지朝鮮語1（일제 강점기 조선어 장려 정책1）』亦樂 影印，  
2004）
- 崔南善／相場清訳（1965）『朝鮮常識問答－朝鮮文化の研究－』宗高書房
- 崔南善／相場清訳（1965；1986第2刷）『朝鮮常識問答－朝鮮文化史－』宗高書房
- 趙容万（1963）「崔南善著「朝鮮常識問答」訳載完結を迎えて」『親和』117
- て（1965）「相場清先生出版記念祝賀会の記」『親和』145
- 朝鮮総督府警察官講習所（1941）『朝鮮語教科書』無声会
- 丁奎鳳（1917：1921<sup>5</sup>）『日鮮双解警察用語』ウツボヤ書籍店
- 鉄（1967）「多久さんを偲ぶ－四十九日法要をむかえて－」『親和』162
- 中村健太郎（1969）『朝鮮生活五十年』青潮社
- なかむら・たもつ（1970）「私感」（「青丘」コーナー）『親和』200
- 野間秀樹・中島仁（2007）「日本における韓国語教育の歴史」野間秀樹 編著『韓国語教育論講座 第1巻』くろしお出版
- 橋本一天（1971）「あとがき」相場清 訳・解（1971）所収
- 三木治夫（1966）「韓国語の多久さんおめでとう」『親和』156
- 宮田節子監修・解説（2000）「未公開資料 朝鮮総督府関係者 録音記録（1）十五年戦争下の朝鮮統治」『東洋文化研究』2
- 宮田節子監修／田中隆一解説（2001）「未公開資料 朝鮮総督府関係者 録音記録（2）朝鮮統治における「在満朝鮮人」問題」『東洋文化研究』3
- 無署名（1963）「夏の松原町－相場先生訪問記－」『親和』117
- 森田芳夫（1963）「アンケート② [常識問答訳載完結に際しての]」『親和』117
- 山口廣司（1971）「俚諺集発刊によせて」相場清 訳・解（1971）所収
- 山田寛人（2004）『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策－朝鮮語を学んだ日本人』不二出版
- 柳根周（1964）「あんなコト こんなコト」『親和』127
- 노마, 나카지마(2005)「일본의 한국어교육」국제한국어교육학회편『한국어교육론3』한국문화사

- \*資料の一部の閲覧に際しては、とりわけ三ツ井崇氏、東京大学韓国朝鮮文化研究室、学習院大学東洋文化研究所、富山大学附属図書館中央図書館にご配慮をいただいた。また、多久（1926；1930再刊）については、山田寛人氏の教示を得た。なお、2名の査読者からそれぞれ有益なコメントを賜り、それを反映させた部分がある。
- \*本稿は2008年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」（課題番号：20320081）による成果の一部である。

[付記] 本稿初校校正段階で、富山大学附属図書館中央図書館梶井文庫蔵の下記資料も相場によるものであることが判明した（同文庫No.0344）。

『韓語基礎会話 一・二・三』朝鮮事情研究会 編集・発行



## 相場清年譜

1877	西南戦争	1932.3.1	満洲国建国
1886.7.2	熊本市に生れる	戦時下 (1937-)	『外務省警察史』の編纂
1903.4.9	熊本県派遣留学生として渡韓		(委員・嘱託)
1904.2	日露戦争開戦	1945.8.15	敗戦
1905 ?	韓国語学校卒業	1949	文部省教科用図書検定調査委員
1905.8.8	留学を了る	1950.6.25	朝鮮戦争開戦
1905	顧問警察の通訳官 (江原道春川) (6.21付で通訳官補とも)	1950.10	外務省出入国管理庁長官室で朝鮮語を教える
1905.9	日露戦争終結	1951春	国家地方警察本部警備課第三係長よりハングル講習講師依頼。橋本 [一天] とともに警察官を対象に講習。
1905.11	日韓保護条約		
1907-1943	外務省官吏、翻訳官、通訳官、韓国、満州で諸調査官等歴任		
1908	内部主事	1952.3中浣	『韓語講義 職務篇』 (部外秘)
1910.7.1	韓国統監府警察官署属	1954	外務省朝鮮語講師 (1955・1956年まで確認)
1910.8	韓国併合		
1913	釜山警察署	1954.6	『朝鮮語講義 第一巻』
1916	釜山警察署警部	1956	『朝鮮語 昭和三十一年度語学研修教材』 管理部人事課
1919	警務局		
1919.3.1	三一運動	1963頃	東京警察学校で朝鮮語を教える (1950年代初にも形跡)
1920	朝鮮総督府奉天駐在通訳官		
1921	退官	1963.11.3	藍綬褒章受賞
1921	外務省亜細亜局 (事務嘱託)	1964.5.6 ~ 5末	藍綬褒章拝受・拝詣を祖先と先輩に報告のため帰郷・各地の友人を歴訪
1923.12	外務省亜細亜局第二課翻訳官		
1927	外務省間島在勤警視 (在間島総領事館)	1964	全国警察官外国語技能検定試験委員
1928	咸鏡北道警察部高等課警視を兼務	1965.6.22	日韓基本条約締結
1927.11- 1929.12	在間島総領事館警察部長	1965.8.1	『朝鮮常識問答』発行
1927.11-1930.2	在間島総領事館警察署長を兼務	1966.7.1	警察協力賞受賞
1930.5-1931.6	在間島総領事館警察部長	1970.9.28	世田谷の自宅で死去・銀盃授与 (内閣総理大臣)
1931-1938	外務省亜細亜局 (1934年-は東亜局) 第二課理事官	1971.3.10	『韓国俚諺集』発行